

受難の主日（枝の主日）（ルカ 23:1-49）

イエスの愛といつくしみの物差しで生きる



今年の聖週間の説教は、全部五島中央病院で母親の付き添いをして
いる時間と、たまたま病院で洗礼を授けることになったご夫婦の働きか
けで書き上げることができました。

ピラトは、イエスのことを三度も「この人に罪は見つからない」と
言います。「三度」この回数がいろいろな場面と結び付いていきます。
ピラトが「この人に罪は見つからない」と証言するたびに群衆は「十字
架につけろ」と叫んで、イエスを罪のある人にしてしまいました。

ペトロがイエスを三度「知らない」と言ったことを思い出します。
長い間イエスと寝食を共にして、「あなたのためなら命を捨てます」（ヨ
ハネ 13・37）とさえ誓ったのに、「知らない」と答えたのです。もちろ
んペトロは平常心を失っていたのですが、人が平常心を失うと、こんな
にも弱いものなのだというのを、群衆も含め、あらわになりました。

「あなたたちをゆるさない」とイエスが考えれば、ペトロも群衆も
ゆるされるはずがありません。しかしイエスは平常心を失った人間をお
ゆるしになります。三度、ご自分を拒んだことをゆるすため、イエス様
は十字架に向かわれました。

私たちは、生涯に一度くらいは、取り返しのつかない過ちをしてい
るのではないのでしょうか。私にも覚えがあります。一度と言わないくら
いあります。何回も、死刑にならなければならないとすら思っています。
しかし、取り返しのつかない過ちを、イエスはゆるしてくださるのです。
ゆるされたので、私たちには今日が与えられているのです。

心の中で、人を「十字架につけろ」「あいつは死に値する」と考え
たことはないのでしょうか。イエスが「あなたは心の中で人を死刑にしま
したね。あなたはもはやゆるされません」と断定すれば、私たちに今日
という日は与えられないはずですが、しかしイエスはそうはなさいませ
んでした。私たちが今日も生きられるように、私たちのために十字架には
りつけにされ、私たちの取り返しのつかない罪を今日もゆるしてくださ
っているのです。

私たちは主の祈りで「わたしたちの罪をおゆるしてください。わたし
たちも人をゆるします」と唱えています。私たちが人をゆるすときの物
差しは何でしょうか。私たちが人をゆるすとき、それはイエスの愛とい
つくしみが物差しとなるべきです。私が先に、イエスの物差しでゆるし
ていただいたからです。

「あんな人は死んでしまえ」と心の中で思った。それをゆるしても
らったのであれば、人に対してもイエスの物差しで接してあげましょう。
たとえ相手が、イエスの物差しを知らない人であっても、私がイエスの
物差しで人生を生きることは尊い価値があり、神に覚えられるのです。

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）